

## お彼岸に想うこと

9/23/2013

北村社会福祉士事務所

代表 北村弘之

この6月母親は 87 歳で生涯を閉じました。14 年に及ぶ療養介護生活でしたが、私にとっては、一緒に過ごした生活の中で昔話や介護体験を通して得るものが多くありました。これは「両親を通しての貴重な経験」となって今後に活かされるものとなりそうです。この間に、母親の介護をしていた父親も 84 歳で亡くなりました。

父親の死は、入院してから半年後の土曜日。いつもより繰り上げて朝に見舞いに行ってみると、もうすでに昏睡状態でした。また、母親は入院した翌日、いつものように病院で話をしてから出かけようと思い、病室にいったら大変苦しがり、その 3 時間後に亡くなりました。

ともに、「死は突然やってくる」ということを目のあたりにしました。義母、義父の時もそうでした。

吉田兼好の徒然草にこんな一節があります。「人間の死は、ふいに、突然にやってくるものだ。死はこちらに顔を向けて、堂々と正面から向ってくるものではない。死はまるで満ち潮のように人の背後に忍び寄ってくるものである」 本当に実感です。

父の姿を思い起こしてみると、毎朝晩と仏壇に向かって「お経」をあげている姿が一番印象的です。父の母親が亡くなったのを機会に 40 歳代から始め、私も幼少の頃一緒に「お経」をあげていたことが懐かしく思われます。また、孫が学校や遊びから帰ってくると玄関先に出て「お帰り……!!」といつもにこにこした顔で迎えていました。また、家族にもいつも優しい声をかけてくれました。もう今は思い起こす光景でしかありませんが、父親の毎日は現在では尊い思い出となっています。

一方、母の姿を思い起こしてみると、兄弟 9 人の長女ということもあり、母親代わりに妹たちの面倒を見ていました。その多くは困りごとの相談で、優しい父親と一緒に迎え入れ、時には自宅に泊まらせていたこともありました。そんな私の幼少の時期でした。母親が 60 歳を迎える前に、故郷小松から私の住む横浜に引っ越してから、妹や弟たちが遊びに来てくれましたが、この時は困りごとの相談でなく、母親の顔見たさでした。今年の正月、両親の「自分史」を作るに際して、私はいろんなことを母親に聴いてみました。その時にできたのは、自分の父親がいつも怒っていて嫌だったこと、また母親は 9 人の子どもを産んでも文句も言わず、貧乏生活を耐えていたことをよく話していました。その反対に、職場の仲間、近所で住んでいた同じ嫁仲間での温泉旅行など楽しい話に花を咲かせていました。やはり、楽しい思い出話をしている時は顔の表情が違っていました。

私も妻もすでに両親を亡くし会話はできませんが、現在では毎日の仏壇での挨拶、また墓前での報告が大切なものになっています。

これまでの両親との生活を通して得たものを活かしながら、自分の今後の生活そして自分の死に向かう準備をしなければならないと思っている次第です。もちろん自分達の成人した子どもへの愛情も、形を変えてやっていきたいと思っています。

以上